

かえり道 さそい道

前住からの法座お誘い状 第9号

●線香の火

※「寺田先生は『線香の火を消さないように』という言葉をよく使われた。：『地方に行くとき、設備や研究費が恵まれないだろうが、その気さえあれば、研究はできるものですよ。一番いけないのは研究を中絶することなんだ。：研究を続けることが大切です。一度線香の火を消したら駄目ですよ』と。」

中谷宇吉郎『随筆集』

※中谷宇吉郎は雪と氷の研究で世界的に有名な物理学者。「雪は天から送られた手紙です」など、美しい科学随想を多く残しました。

※恩師の寺田寅彦は、物理学に多くの業績を残しつつ、漱石山房の一員として、また俳人として文芸にも造詣が深い人でした。

※「天災は忘れた頃にやってくる」の名言は、寅彦の言葉を中谷が書きとめたものです。

●ガラス板

※「日常生活の世界と詩歌の世界の境界は、ただ一枚のガラス板で仕切られている。」

このガラスは、初めから曇っていることもある。生活の世界のちりによれて曇っていることもある。

二つの世界の間の通路としては、ただ小さな狭い穴が一つ明いているだけである。

しかし、始終ふたつの世界に出入りしていると、この穴はだんだん大きくなる。しかしまた、この穴は、しばらく出入りしない

いでいると、自然にだんだん狭くなってくる。

ある人は、初めからこの穴の存在を知らないか、また知っていても別にそれを捜そうともしない。それは、ガラスが曇っていて反対側が見えないためか、あるいは：あまりにも忙しいために…。

穴を見つけても通れない人もある。あまりにからだが肥りすぎているために…。

しかし、そんな人でも、病気をしたり、貧乏したりしてやせたために、通り抜けられるようになることはある。

まれに、きわめてまれに、天の焰を取って来てこの境界のガラス板をすっかり溶かしてしまふ人がある。」

※昭和8年に俳句雑誌に寄せた寺田寅彦の文章です。物理学者らしく人生の極意を線香やガラス板に喩えた人でした。

●小さな穴



※ご門徒の暮らしとお寺参りの間にもガラス板と小さな穴があるようです。

※この穴を法座のたばに通り抜けてくださる方もあります。（：ガラス板を溶かした人も！）

※穴が気になりつつ通り抜ける機会を先延ばしする方もあるようです。

●歴史への貢献

※文化や習俗を次代に受け渡すのは社会貢献ならぬ歴史への貢献です。お寺参りも…。

※あなたのお寺参りが次代へ歴史をつなぎます。線香の火を消さないように…。

※きばってお参りください。